

# 京鹿子

中国书画函授大学肇庆分校  
肇庆分校建校二十周年纪念册



6月号

鈴鹿 呂仁  
拾掬集 その六十九

チューリップ百の瞳のつぶらなる  
キャンバスに少女と雲とチューリップ  
ぬたずりの木々のささやき春の月  
春の月足手まとひの雲ひとつ  
実相の影は散らさず余花白し  
吟行御所界隈  
新緑の御苑はるかに五山据ゑ



青嵐九門のひとつ吹き抜ける  
をがたまの天衝く先へ青葉風  
花蟲の一人遊びの高さかな  
円虹六月号「夢」

一雨は万の夢へと四葩の夜  
あぢさゐの雨を抱いては夢こぼす  
あぢさゐの毬のひと夢万華鏡  
万華鏡の中にあるらし四葩の夜  
絡みとる煩惱ひとつあぢさゐ寺

近詠

和田 照海

下馬桜

器量よき蓬餅なり隠れ里  
にぎやかに舟に乗り込む鹿尾菜採  
阿国忌や延命水のをろち駅  
みゆき野の軽便の笛下馬桜  
一蝶の後れ馳せなる野風呂岬



近詠

松本 鷹根

新茶

新茶汲む川きらめきて宇治を去る  
雨戸開け躑躅の朱花の日面に  
夏めける風の果てなる遠伊吹  
芳りは桜花散乱風に酔ふ  
母の日や妻に購ふ給湯器





桜舞ひ散る

花の雨まだ降り止まぬ夜の哀愁  
南蛮人もみて洛中凶花の風  
碧天へ桜舞ひ散る峽あそび  
花しぐれ水輪を重ねし水尾ふたつ  
夜桜や遠近定め椅子ひとつ

英華採集

春一番竜の鱗を野に残す

京都 四辻進

「竜天に登る」。竜は想像上の動物であるが春分の頃に天に登り雲を起こして雨を降らせるとあり中国の古代伝説から季語になったものである。掲句は、この季語を下敷きにして春一番が竜の背中を押し天に登らしめたとしたのであろう？その証拠となる竜の鱗が野に残された、と捉えた奇抜な発想が生まれた素地がそこにある。余り馴染みのない季語を逆手にとってひとつの詩へと昇華させたことを評価する。

母の百歩曾孫の一步梅香る

荒尾 荒尾かのこ

曾孫とは当然作者から見ることであろう。単純に計算すれば四世代となり作者の母の年齢を推し測ることが出来る。歳を重ねるにつれ足元が覚束なくなり歩くことに四苦八苦する母を見ていると百歩も歩けることは、作者にとって嬉しいことか、苦しいことか、それらは、同時に歩き始めた曾孫の一步も喜ばしいものである。歳老いた母と幼い曾孫を同じ目線で眺めている作者に梅の香が優しく包んでいる。

春泥やはじめはほんの遊びから

岡山 佐藤千恵

人の人生サイクルは、幼年期・少年期・青年期：老齢期などに分類されるが今は後期高齢者という該当する者にとつては余り有難くない言葉をよく目にする。掲句の「はじめは…」は様々な意味合いを持たせる言葉だが、季語の「春の泥」を置くことで大分限定されてくるのではないか。善し悪しは別にして何事にも興味を持つ若年層は、「ほんの遊び」がきっかけとなる。季語の斡旋の妙が光る。

長茄子 沼田巴字

古本屋の軒端暮れけり燕の子  
河骨や上水道は江戸名残  
あぢさみの乱れ咲くとき何か音  
魚めきて跳ねてをりけり長茄子  
白茄子や農一本の村起し

初つばめ 植村蘇星

世はなべて怒りや吾が損山笑ふ  
誉め上手お返し二倍山笑ふ  
麒麟駆く天守煌々初つばめ  
パンのみに生きるに非ず木の芽風  
畑を打つ打つは心の打ちどころ

落花 丸井巴水

走者過ぎ再び宙に舞ふ落花  
角取れし石の齢にそふ落花  
春燈の無き大河の音流れ  
蒲公英の天文台となりし絮  
大原女の荷となる落花くだるのみ

みどり濃し 北川孝子

あぶり餅焼く香ただよひ春そこに  
たまゆらの日のほつほと花菜とき  
花言葉どうでもよくて葱坊主  
かへり見る日々芒芒とみどり満つ  
想ひ今あの世この世にみどり濃し

椿 直江裕子

ひと庭に降りながら消ゆ春の雪  
書に倦めば梅に目のゆく日の平ら  
老いながら椿の美学また拾ふ  
春寒のそらごと目薬頬ながる  
探しもの人には言へず春愁ひ

花の夜 伊藤希眸

柔らかな風の松島浅蜷採る  
ぱんと張る帆は海を曳き春陽曳く  
沼水の地震に渦巻く葦の角  
春の雷真夜のさわぎを湖に放つ  
花の夜の卓にはづせりネックレス

人肌 高木晶子

今あるをまぎれぬやうに黄水仙  
春の風天の羽衣手に戻る  
参道に縁は問はぬ花馬酔木  
三月の蓮枯れしまま逢へぬまま  
人肌を添へて今年も雛まつる

しどろもどろ 奥田筆子

はやざくらひとり歩きは吊橋めく  
まんさくやしどろもどろのまんだら図  
杜はいま海底花びらの貝ばかり  
歴史つて化学だつたんだ卒業す  
風を行く紅緒の巫子は水すまし

# 神麓集

紫陽花通

井上菜摘子

はじめての町のカリヨントタ焼くる  
紫陽花通まちがへられし遠会積  
さびしさを言ひあふ紫陽花のむかう  
新書判ほどがよき仲額の花  
あぢさゐの雫モノトーンの記憶

春告鳥

村田あを衣

竹林の風は伴奏春告鳥  
観音の華やぐ千手春なれや  
春泥を飛び心身のざはめきぬ  
悪人にはぎれず春蚊を振りはらふ  
落椿瀬に乗り空へ流れをり





# 京鹿子集

## 豊田都峰選

今生の師系ひとずち水仙忌

京田 山中志津子

春の雪ピエロのやうに踊りつつ

百千鳥森の扉を全開に  
早春といふ大時計の長針

城陽 鷺山 珀眉

薔薇二月芽吹きの中に刺隠し

羅城門見ずに遅日を言ふ勿れ

住宅地図紅梅白梅落しこむ

つちふるやシルクロードの直行便

蕨狩大地の命摘みにけり

茎立ちのともあれ十把一絡げ

小さき歩について来る風ふきのたう

京都 井尻 妙子

忘るるも己が器量や辛夷の芽

福山 亀井 福恵

寝返りて背骨のきしみ春の雪

気が付けば庭のふくらみ春隣

しら梅にふれ日常には触れず

人が来て春風がきてインターホン

春の雪修道院はミサの刻

雲一片紅椿落つ音ひとつ

マシユマロの弾力二月十四日

かにかくに命ひとつを着ぶくれて

福耳に慈愛のまなこ野風呂の忌

福知山 西村 白籽

母と子のしばし語らふ春休

畦塗りて人と逢はざる日の暮るる

福山 石原 孝人

春雨やさよなら言へず黙り合ふ

揚雲雀声より上は乱気流

身中を水走る音草萌ゆる

小説に挟む初音の葉かな

段落やをどり場に立つ春休

噂のはみ出してゐる雑木山

木の芽風感情線の穏やかに

京都 菊池 和子

芽吹くにも序列あるらし賀茂の朝

直進のつもり歩み蝮の道

花ゆすらさうあの日から人見知り

春一番竜の鱗を野に残す

君知るや蝶のこまかな足づかひ

春愁ふ余暇のプランは黄信号

夜の梅ワイングラスの紅くもる

高槻 安田 優歌

ひかりてふ世の魁や水仙忌

お土居跡息ととのへる楓の芽

鉢巻の冬菜集団抗議かな

比良の嶺に未練残して鳥雲に

青丹よし奈良の芽木よりいろはうた

母の百歩曾孫の一步梅香る

病棟の雛段失意の胸うつ

花粉症知らず眠りに夢知らず

天界は掴めぬままに雲雀落つ

かげろふや父と弟のゐる昭和

鐘霞む礎石三つの西寺址

大阪 本郷 公子

和封筒の墨跡滲む弥生の灯

過去はまだかがやいてゐる春の虹

岡山 佐藤 千恵

ロゼワイン瓶の底方の春の夢

春北斗こぼれし記憶手繰りよせ

空かたしむらさきまとふ露の臺

すかんぼやとんがつてみるガキ大将

春の雪あはあは過去は消せぬのに

大き夢追ふ春泥のスニーカー

